

大子に木質バイオマス発電所

森林資源活用に期待

森林面積が4分の3を占める大子町に、未利用木材を燃料にした木質バイオマス発電所が建設される。同町と事業者の「エジソンパワー」（本社・東京都中央区、山田敏雅社長）が1日、町役場で企業立地に関する協定書に調印した。来年10月の本格稼働を目指す。綿引久男町長は「地域の活性化と森林資源の有効活用につなげたい」と期待を寄せている。

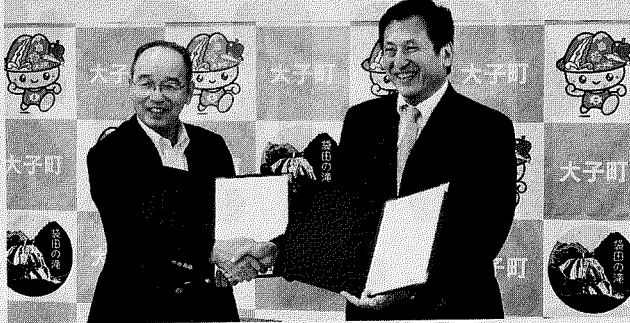
発電所の名称は「だいが森林の発電所」。来月から建設予定地（約5000平方メートル）の造成に着手。来年4月に建設着工し、8月から試運転を行う。発電容量は約2500キロワット（定格出力）。FIT（固定価格買取制度）の認定を受け、東京電力に売電し、年間4億円の収入を見込む。

最大の特長は、加工したチップを炉の中で高温の砂や蒸気と混合させることでチップからガスを発生させ、エンジンを動かして発電すること。

町と事業者が協定

チップを燃焼させて水を熱し、発生させた蒸気でタービンを動かして発電する従来の方式より、エネルギーの変換効率が高いという。このガス化技術は再生可能エネルギーの先進地、オーストリアのギュッシング市で導入されている。同町では、ガスエンジンからの排気ガスなどの熱を利用し、加温した温泉水を町内の温泉施設に供給する計画もある。

株式会社エジソンパワー・大子町 企業立地に関する協定書調印式



昨年、町内の林業関係者が「だいが再生可能エネルギー協議会」を設立し、バイオマス発電などの導入を検討してきた。メガソーラー発電に次ぐ再生可能エネルギー事業としてバイオマス発電に乗り出した同社がそれを知り、同町に発電所1号機の建設を決めた。

燃料として年間約1万2000トンの未利用木材の調達を見込んでいることから、同協議会は「木材の切り出しや運搬、植林などで新たな雇用が生まれる」と話している。町も固定資産税など税制面で協力する。

同社は全国11カ所でガス化技術を採用した木質バイオマス発電所の建設を計画。山田社長は「1日も早く第1号を運転し、この事業を成功させたい」と意気込んでいる。

県内では、日立造船が常陸太田と常陸大宮両市にまたがる宮の郷工業団地に大規模発電所を建設するなど、バイオマス発電が広がりつつある。

【佐藤則夫】

調印式で協定書にサインした綿引町長（左）と山田社長（大子町役場で）